

す。総目録作りが8割まで進んだ今、4万3000点を超える点数になりそうです。

2 出版事業。東京の吉川弘文館から『永青文庫叢書』5冊シリーズを刊行中。すでに『中世編』(総目録の4冊)を出しています。

初期編の4冊を出しています。指図とは、大名家の屋敷の間取りを示した図のこと。書状などの文書類はすべて写真を撮り、これを活字に起こしたものとセットで掲載。最後に解説を入れて、史料の意味を明らかにしています。1冊目の『中世編』に

### Point 3 江戸時代の 熊本から見えてくる 自治的な地域行政

細川家文書の中には、信長からの書状のように一枚で1点と数えるものだけでなく、厚さ30〜50センチにもおよぶ綴じられた文書が1万点ほどあります。これは、1年分の藩の行政記録を綴じたもので、その中には、地域住民レベルで起案、立案された案件が無数にあり、総目録のさらに次の目録が必要となり、目録作りだけでもキリがないくらいです。

地域住民側の起案による事業は、例えば矢部の通潤橋の建設が挙げられます。これは惣庄屋の布田保之助一人の力ではなく、材料の調達や費用の工面、人材や工事期間についてなど、地域の中で農民たちが合意を重ね、それが下から申請されて初めて藩の事業として認められ実

は織田信長、豊臣秀吉の書状も入っており、本の出版を通じて史料の学術的な位置づけを明確にしたことが、今回の国の重要文化財指定にもつながったといえるでしょう。

3 研究成果の社会的な還元。県立美術館での「幽齋展」(清正展)をはじめ熊本日日新聞での連載(「武将・幽齋と信長」)ポスト戦国世代・細川忠利の国づくりにやシンポジウム、講演など、諸機関の文化的な取り組みと連携することで、研究成果を社会に発信しています。また、幽齋

行されたものです。熊本の19世紀の土木、地域改善事業は、そこに住む庶民が惣庄屋らとともに起案書を作成して決着を受けたものがほとんど。大名家の史料でありながら、江戸時代の熊本の人々が何を願い、何を考えていたかが分かる宝の山なのです。

### Point 4 近代の日本社会の特徴 が明確になった 戦国時代を研究

稲葉教授の専門は、戦国時代の研究です。戦国時代は、明治

の隠居地だった京都府北部にある舞鶴市の中学校の副読本「細川幽齋と舞鶴」の作成に全面協力。同センターのスタッフが分担して執筆校正にあたりました。

4 将来、史料を保全活用する専門職の育成。現在、スタッフ18人の中には学生や大学院生が4人います。これだけまとまった史料や貴重書を管理している地方大学は他にないので、研究を次の世代に引き継ぐ人材を育てることもセンターの大事な役目です。

もし戦国時代が続いていたら、日本は海外の列強に植民地化されていた可能性が高いといえます。そういう意味でも、戦国から江戸初期にかけては、近代史に大きな影響を与えたといえます。天下泰平がどのように生み出され、維持されていったかを読み解かないと、日本の歴史は分からないと思います。

**4モ2 信長文書**

織田信長は、書状や掟書(おきてがき)など各種の文書を出していますが、現在その文書類は800点弱しか残っていません。そのうちの59点が永青文庫にあります。

なぜ、信長の文書が少ないのかというと、豊臣秀吉や明智光秀、柴田勝家など、家臣のほとんどが滅亡し、取り交わした手紙類が消滅して残っていないからです。

細川家のように明治時代まで続き、信長の書状を伝えている大名家はほかにありません。加賀百万石の前田家あたりに残っているものですが、実は前田家は信長から直接もらった書状は少ないのです。信長が、約10年間にわたり同じ相手に出し続けた手紙が一括して残っている例は他にありません。

**4モ3 細川幽齋という人物像**

細川家の初代である藤孝は本能寺の変後に出家して家督を嫡男の忠興に譲り隠居。幽齋と号しました。この幽齋については、計算高く腹黒いイメージで見られていました。しかし、永青文庫研究センターの研究から、戦国時代における幽齋の役割が見直されるようになりました。

織田信長が最初に政治権力を握るためには、室町幕府の將軍、足利義昭を利用する必要がありました。この時、二人を結びつける役目を果たしたのが幽齋だと考えられます。幽齋は、母方が清少納言の血筋を引く公家のお孫で、「古今伝授」の秘説を伝えるた一人の人物として、当時の文化人の中でもトップクラスでした。

豊臣秀吉は関白になってすぐ、大友と交戦中の島津宛てに停戦を勧告する手紙を出しますが、この手紙に幽齋と千利休が「添え状」を書いています。島津家では、家の格が違うと秀吉を無視しますが、幽齋には返事を出しました。おかげで島津家はつぶされずに済んだのです。このように、都と地方の有力大名の間を文化的な側面から取り持つて、コミュニケーションを成り立たせた幽齋の役割は大きかったといえるでしょう。

また、幽齋は足利義昭に従って流浪していたころ、室町幕府の儀礼やしきたり、文書の書き方の先例などをすべて書き写して残していました。徳川家康は江戸幕府を開いた時、江戸城で諸大名を従えて將軍としての儀礼を行うノウハウがありませんでした。幽齋は、家康の求めで室町幕府の儀式やしきたり、書式などを書き写したものを提出し、それを参考に、江戸幕府初期の儀礼の体系が整えられたと考えられます。

結局、幽齋は秀吉、家康による天下統一の際に、室町幕府の証言者として文化部門のブレーンとなり、天皇制を利用した再統合の仕組みを作り出した、奥の深い人物だといえるかもしれません。

代の日本社会の特徴が明確になってきた時代だからだといえます。

一例を挙げると、庶民の間でも名字を使うようになったのが戦国時代。江戸時代の庶民には名字がなかったといわれますが、実は公的な文書に書けなかっただけで、名字は戦国時代からあったのです。ということは、そのころになると「家」という組織が庶民の間にも成立していったことを意味します。

**なるほど!**

目録作りだけでも何年もかかる膨大な史料の宝庫「永青文庫」。その研究には幾世代もかかるかもしれません。でも、それは「知」の大航海時代の幕開け。これから、ますます日本史が面白くなりそうです。

## 熊本を知ろう!

熊本県松橋収蔵庫 収蔵品から

### 【貝類の不思議】

「貝類の不思議」展 8月31日まで開催中

貝類は、軟体動物に分類されます。世界に約10万種以上が深海から高山まで、また淡水にも陸上にもと、さまざまな環境に適応し生息しています。

日本にも約1万種以上が生息し、熊本県でも約4千種以上が確認されています。

多くの種類は貝殻を持っていますが、進化の過程で貝殻をなくした種類も少なくなく、イカやタコ類、ウミウシ類、ナメクジ類なども、実は貝の仲間です。

なんと、貝類の魅力は、その殻の持つ色彩や形態、そして生態の多様性です。1ミリの満たないケンガイ、殻の幅が2センチ以上で

県民から寄贈された熊本の自然と文化に関する貴重な学術資料が約64万点収蔵されている熊本県松橋収蔵庫。その収蔵品から熊本の歴史や文化、民俗、自然などを紹介します。今回は、「貝類の不思議」についてお伝えします。

重さが200g以上にもなるオシヤコガイ、人をも殺す毒を持つタガヤサンミナシ、その希少性から100万円以上で取り引きされたこともあるタカラガイ類、約4億年以上も形を変えずに生きてきたオキナエビスの仲間たち、そしてさらには、温泉に浸かっ

て生きている巻貝(オンセンミスゴマツボ)さえもいるのです。このように、実に多様で不思議な貝類の世界が広がります。

松橋収蔵庫には、貴重な貝類の標本が数万点も保管されています。また現在、企画展「貝類の不思議」(8月31日)を開催しています。見たことも聞いたこともない貝類の不思議をのぞいてみませんか。(熊本県松橋収蔵庫 坂梨 仁彦)



オンセンミスゴマツボ  
※左の一目盛りが1ミリ



約8センチ  
ハコニヒナエビス



約1センチ  
シラヒメウミウシ



約4センチ  
タガヤサンミナシ



約3センチ  
ニッポンダカラ

**Data**

熊本県松橋収蔵庫  
宇城市松橋町豊福1695  
☎0964(34)3301  
開館時間/10時~17時  
休館日/日曜、祝日、企画展示が開催されていない土曜日、年末年始  
入館料/無料  
駐車場/あり  
http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/